



特 別
A5
6590
20



土左

南洋著

追善

露乃輝世

高府

花全考訂



序

天地冥合の化機ハ自用巽倫の交化也
任せしむ自然の妙境あり是と云の業あり
あつらひして鬼神を感せしめんとし志士
の類ハ所やそむるもよらうとて誠り
かゝる事の本を自ら用えしむる
是を得たりとせん言外之百年間の一人
あり愛する石川鬼白花小の月也

嗚呼さるる不糜彼類ありあつて五十年の
練磨をかくる俳諧二百年はあつた新むも
うらうら惜哉去年七月電光石火の世
をさうらうさうらの一章ふ一大地輪界を照
し急風を吹かすありあつた人生ある
ももつた必滅を滅して徳をのぶ代と照
んん生を古哲もあつたありあつた
忘辰再新をうらう悲歌の細中一山

鬼毛不灑を早く追慕の小冊子と
白うも孝ふううううううう
天無のあつたうううううう
重醜をううううううううう
を拾つて天保十二年のううう
詞を加ふ

長和軒
延志

つゝし天保十二丑の〜白子遊陣の
海軍の〜
神世の一章と様々ふのちせ〜せ〜れ
〜其父鬼十子あり十子も又〜
〜知大石綱の存又〜
改めらふ樂〜たる牌ありや今〜
改まる事ふ〜る事の廢ゆるを〜
南洋めし〜と果〜と〜

瀧下なる女子たる其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその

事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその
事いへばなれば其始末とていへばその

連日園
花全伏て申

辞世哥行

兔白

疾くもろくもろくもろくの海世行

中しむのちのちのち

北舟

海はるるるるるるるるる

華山

るるるるるるるるる

里水

中るるるるるるるるる

橙水

こころのちのちのち

楠水

るるるるるるるるる

素白

日よけのしほり

茶石

鶴のしほり

蘭窓

菱のしほり

瓦石

舟のしほり

南洋

松のしほり

花園

松のしほり

林枝

一葉のしほり

梅隣

松のしほり

松帯

名橋のしほり

名橋

赤英のしほり

赤英

松石のしほり

松石

成堂のしほり

成堂

松陰のしほり

松陰

佳水のしほり

佳水

如水のしほり

如水

古仙のしほり

古仙

千一を毎り梅のこころ

素琴

あ風とて越はるるそね留る

潤水

柳地こころをこころに

柳石

のこころをこころに

里川

梅とこころをこころに

梅枝

こころをこころに

三枝

折葉の塗の起るる

五泉

鏡合のやうな

柏枝

樂家才なき

夏柳

池よりうらやま

里扇

稀よりこころ

如仙

あめあけ香り天

延志

果あけ

利兆

あつき今も福魔の強ひ去限るをさ
まうらゝゝ疑ひてはぬかぬと
通く招きよまき顔の赤くもあつと一
高もくは積むをいねくもくつてあつた
の境に入らぬ後まき我も代り意文
と補佐せよとて是を市へ今
本をくくあつとあつと集り集りよ
あつたあつとく余はよ述懐の

一喜あつとくあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつと

あしあそめ袖わらわらむ月のお
あそめ甲斐あそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ

あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ

完全

あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ
あそめあそめあそめあそめあそめ

右歌仙行下略

十

門人鬼白の別を悼一

旭松

その魂や目先と通ふ秋の風
清の七字もかいられお月

南洋

右全下略

又月中の二日男鬼白とまゝのうら
涼しき鳥の心まよひてさかす十日と吊

七穂と送つて樹下の上とたなかく
碑さふつ

鬼十

清の心はまよひてさかす十日と吊
冷涼とあつてさかす十日と吊

旭松

右ハハ表下略

又身の子ある鬼白のぬくみ予うら
の秋の心はまよひてさかす十日と吊

社

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~ 南洋

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~

~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

予と姉〜〜〜  
鳴呼惜〜〜〜  
又〜〜〜  
〜〜〜

夢の〜〜〜 北舟

〜〜〜 柳石

〜〜〜 里水

お〜〜〜 素白

鬼白のぬ〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
二日〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜  
〜〜〜

女無明鏡不知面精粗士無良友

延志

不知行虧踰可謂士婦一要矣  
石川鬼白城東農街人也性  
溫柔謹素以孝友所稱家產  
之餘暇富滑稽道筆鋒雄健  
詞陣風流奇巧出人意之表親炙此  
齊翁增有聲余意幼王日久偶會翁  
之北陵亭俱談俳與余意於是恨面  
會之晚遂頗意禮待相文可憐名器

雖光勳業未融今歲辛丑六月罹疾  
祈療無驗以文月十二日下世受齡十有  
九歲嗚呼哀哉天假年何奪之速  
也同社之交爰無復此子自今而後  
情與論皎々眉目猶左目前不覺  
淚灑於閑窓机上

窓小兒了了死も洞て煉の多

華山

草中小鬼隠れて丹白し

天香山 普泉

白地遠き岸に秋風

潤水

百ヶ日

雪しある空より魂の百ヶ日

北丹

ささく秋のむるのささく神

鬼十

右百負下畧

残菊のささくあつる日較小

花全

ししきし秋も夏の間

鬼十

右歌仙行下畧

一周忌

夕月やささく文月の空あり

掬水

花小のささくし秋のささく葉

支懸

右歌仙行下畧

あけくささくとほしも一巡り

花全

心よりかむ月のあり

鬼十

右全下畧



追悼の各章、餘ハ畧——

名録を載す

名録

當所連中

一 花の散るまじく花のくさるまじく 赤英

それの散るまじく花のくさるまじく 花園

それのくさるまじく花の散るまじく 瓦石

十 柳やまき干しの花ゆへまじく 松葉

りつ葉やまき干しの花ゆへまじく 林枝

雨をわすれしる花をすも 梅隣

らんせしる花もゆへまじく 里川

控上る簾り月の秋涼し 茶石

予傘ふる雨降る花 菊窓

柵のまじく花のくさるまじく 梅枝

糸くさるまじく花のくさるまじく 名橋

夏腐もみじく花のくさるまじく 玉泉

花のくさるまじく花のくさるまじく 成堂

新はらのうしろのやまの一角 松陰

さうなやまのふもとに 松石

さきの月影のまはりに 古仙

夕まや川上よりく月のみ 素琴

伊勢はをれぬもぬふいけの風 如仙

水辺の草の力をくく 佳水

白菊や日のまへにぬらぬら 栢枝

さうなやまのふもとに 里扇

梅の木の影をけりては空 如水

ふいけの影のまはりに 乙枝

何れより角をよるそ 橙加

燈火の影をよるそ 夏柳

名月や影をよるそ 利兆

舟中れの影をよるそ 潤水



新らうきも影をよるそ 桃溪

枯草やあられ穂あうそ花あうそ

尾島

舟あけて放くそつりや夕霞

黒岩 玉泉

待ちつて秋の月もうあふそ

伊野 月溪

竹のさふ雪の力をそあけ

而楽

枯草や入目小鶴の踏あうそ

清曠

真草もあふれしや佛甲

暮花

芦解きやのこる星の磯行く

星山

花守の龍舟てそらけあうそ

貞甫

あうそあうそ海を渡る

杏甫

そら星をうらむそや好のそ

望 月下

捨籠の水掬し知守るそあ

知伯

角力そら子信のたうそ凡そ

松和

舟さやあふそ舟あけ

出間 徐眺

あうそあうそ月あふそあ

高岡 四春

あうそあうそ秋の青切る

高岡 環之

苗代ふ世嵐あうそあ

素月

と折し菱小二丁をふおくれり

似梅

水鳥の音と波のやうな中

戸波 只隠

菊苗やまてまて植るほひ花

名溪

鈴こりの風さるるせいのひらり

知足

風小杖をわけてさきかきり

里笑

春麦のほりさきある日わが

陽谷

さねるさるるさねのさるさる

西羅

新庭の河を歩りやまの月

大塚 映花

明て松よりある山や舞の丁

忍花

月ふ又新葉の出来は横

北耳

園の菊さひゆる秋を知らる

比江 季山

肌寒がるさるるやまのなま

改田 蘭石

ふら松や風りくる 橋

璞舟

松の色りよ 青一夕の葉

里伯

手は雀網一村越えてんけり

田村笠 松二

卯もりや地ふさるて清え急

一嘯

此

之秋やまきのふもありし多あつ  
 多よ多の接みくもるもさ面外  
 日ふ途くふくやくもわ佛外  
 つる帰もは先あくも懸うれ  
 さあやさあはるるも月夜  
 帆よまゝる風ハ白きをまる嵐  
 折く水鷗や守らまやまほら  
 帆極ふ月さる紙中 時 鳥  
 可水 文雅 三固 魯仙 中村 固梁 丸岳 松園

窓の月ちりりし中の庭葉あけ  
 五月ふかや解きのにし板底  
 佛舍利とのせて蓮のほろ葉か  
 五月ふかや巖を踏るもこの音  
 五松小きのふ昔もやまらるる  
 折るのまらけて轉るもろくれ  
 優るねく衣うけり夕納涼  
 白砂よ花砂かく月和清天  
 宿毛 卯鷲 魯三  
 笠 眠之  
 入田 箕狐  
 佐賀 栗陽  
 五社 清里  
 窪登 貫山

ふる葉の陰や障子よ夕附日 野田 淇洪

手開や伽羅の香さめし香の幼 龍二

山吹やかりりるまぬくの底 山田 文志

もえや思ひまじく天地人 董紆

開く竹地の節くこぞ牡丹 其舟

重と氣お友のちわゆるさく 物部 自若

汗雫や夕よひわく捨舟 後面 素琴

喉くみふ骨あり初氷 十市 欽古

藤の節乃あるよめやぬれ佛 昇六

接子より紅き一ほる夕目 梧風

千草の隈よふもね縁所 龜涛

水色もようろね程の雨さし 赤岡 我道

今年一斗らくこして泉波おき 知還

葉の産もくく産さる菊の花 女 たの

朝暁やあけふ言くらの音 和合 午松

月の如て指さるるこそその家 琴 琴松

梅のつぼみてゆくさ浦の小島外

赤野

十雨

昔の垢活しとあつて残る花

安喜

如水

ひらりと利く船頭ゆく小蝶のれ

安田

樂之

雪のや降りよと居る牛の陰

田野

吐紅

昔の技色のさくらやまの香

巢山

催ふくるまをれとされて雪澄し

奈牟利

米阜

雨あつぬ雨降る葉のく

旭山

漬む文りのせと昔にや火の虫

益三

流りつゝ鴨や決の夕月花

久礼

魯卿

精進の海と新たれ麻塵外

帯河

粥飯の減る時志そ〜小島外

須崎

青宇

丁臭も新なるおや年一水市

旭扇

雪のやけき〜してゆるる小島外

宇杉

つものちのききてふきの月夜外

樵夢

借て来くるるん〜や夕時雨

石立

其石

ぬらついで世を住りよる瓢々外

内郭

集和

集

夏夜狭り重き山くれ

左運

雲もみさぐきあり秋陣

不石

持て知りぬ菓子清し蓮の花

素水

ゆききりとくまを吸ふ後すけ

坎蛙

貴州や新篠のぬり目のきり

止柳

摺子や水のへうたる白川原

樗山

きんやふくく火のちうくわり

壺爰

十六夜や雲の海にすまふ山

高知  
鳥水

和鴨の屋をくくく暖の風

青二

二日月の上を紙くり鳥の群

北子

るあしぬ風のゆるあつ暖の月

穆風

懐のうけ結追飾してゆきくわり

歩牛

掃よそと土ふまはやく花の葉

桃雅

参ふまゝくふも参らわて二日爰

竹塙

五尾沼の名くちぬ花を雨録ふ

其松

花さき月の木下を過るふ

呂石



言言一燈る新しき家そよよれ  
支撰

昨楚て嵐の姿かゝめくろく  
挑英

ふと持し燈ももるんぬしき  
池翠

蛇あくや藤のまの空く時  
井花

風流よやま系こころぬる日の白  
旅涼

梢まて存く燈かや与魂  
梅泉

一浦と鯨り揚るくろく  
新橋

風あれて月小あくくろく雪の雲  
只常

ふの糸あく燈くろく若きまの光  
吐花

五臺山

まびやあくくろく七日の月静  
夢中

あかやあくくろくあかあか  
三花

深梨人あかあまの風とあか  
好古

何あかあかあかあかあかあか  
松窓

同麓

和香やあかあかあかあか  
松翠

灯塞や窓りさくあかあか  
如泉

尾戸

簾中あかあかあかあか  
月海

鬼白風子ハ家君小名を思ひし  
此も又風雅小人和しくありて海  
内小名を思ひしを歌弱冠少を  
過以世を去れしもの計なきを  
の歌なきもあはれに堪えしと思さるる  
新編む玉鬼志らんとするの室

八十二叟  
蓬樂老人

舅故鬼十の娘一 天保十二の年  
男鬼白の遠別をなげき進み  
その身も又くくふと悔しき  
とありて鳴呼女舅や性得温  
和しく茶事し小紙弔ふ業餘を  
楽しめられし世小親む人多く  
されしふの雨窓よ追慕し吟章  
文章小余れり是を白く集り合せ

ものせしと或夜の茶話し衆談せ  
し父をこゝ子の追悼ふほしと  
事一の藤原ありをちこれ又ふれ  
樟小別んし一室して愛ふ唯一章を  
あけ舅の秘念を續て鬼白の靈よ  
告んしすのめ

南洋

うき世を我身ひとりと思ひたり

もらふ洞りかき曇る月

花全

稲屋の稲もあはれ年あけ

延志

地をよちめる本音しのろ

里水

武士も縁の本やうらうら

柳石

奴 アハモリ ぼく アハモリ 盛

素白

右六句表

つゝ〜 此集をとうり返して〜

今をわたり如露亦如電秋の音

微髯

芥

